

# Asian Summer School In Bangkok 2023

(8/20~9/2)



人文学部	英語英米文化学科	4年	野田	泰誠
人文学部	英語英米文化学科	4年	森岡	李胡
人文学部	英語英米文化学科	4年	尾曾	さくら
人文学部	英語英米文化学科	4年	佐藤	永汰
人文学部	歴史地理学科	4年	伴	紗也子
国際関係学部	国際学科	4年	伊藤	勇人
応用生物学部	環境生物科学科	4年	丹羽	愛優美
応用生物学部	環境生物科学科	3年	永野	佑樹

# 目次

1. 本プログラムの目的
2. 個人の参加理由
3. 日本以外の参加者
4. 学習について
5. フィールドワーク
6. タイ王国の歴史文化体験
7. タイ王国での衣食住
8. 異文化交流
9. おわりに

## 1. 本プログラムの目的

アジアの持続可能な開発に関わる諸問題とGIS、さらにGISがその諸問題にどのように貢献しているかについて受講し、発展著しいアジアの現状と問題、GISのToolとしての有用性に対する認識を深める。また、現地訪問により、アジアの急速な発展と付随する問題を実感する。

英語による講義での知識の吸収を体験し、その重要性を理解するとともに、国際感覚や、卒業論文、修士論文での問題意識を育むことを目指す。 (永野 佑樹)

## 2. 個人の参加理由

**野田** 近年、アジアの国々が成長しておりタイはその中でも目まぐるしい成長を遂げているということを知り、ニュースを見て知りました。そこで、今回のサマースクールにてその発展を支えている、GISについて勉強し、タイの名所を訪れることで学びと経験を得られるから。また、タイだけでなくアジア国々の学生と交流することで異文化を知ることができるため。

**森岡** 来年からビッグデータの解析やAIに携わる仕事をするようになったため、アジアサマースクールの講義内容やGISに興味を持ったから。4年間英語を学んだ成果を留学を通して、アウトプットしたかったから。

**尾曾** 多様な英語を使って新しいことを学びたかった。アジア各国から来る学生と友達になり、異文化体験を行いたかった。

**佐藤** 私たちの暮らしとGISとの関係について考え、GISがどのように持続可能な開発・社会へ貢献しているかを理解するため。また、アジア圏での異文化体験から物事を広く考える態度を身につけるため。

**伴** GISが世界でどのように貢献しているのかを知ること。自身の英語の能力を高め、国際社会についての理解を深めること。

**伊藤** 語学力の向上、アジア圏の生活様式や文化やAI、GISなど新しい知識を将来の仕事や生活に活かせるようにするため。

**丹羽** 就職先で海外のお客様と関わる機会があり、英語力やコミュニケーション力をつけたかったから。また、タイだけでなく、多国籍の学生と関わることで、様々な文化を知り、自分の視野が広がると思ったから。

**永野** 英語力を向上し、英語で日常会話や授業の理解をできるようにするため。自分の専門分野である環境問題について、タイでの課題や成果を学ぶことでより広い視野で環境問題への理解を深めるため。

### 3. 日本以外の参加者

#### ・タイ王国

氏名: Pacpoom Panchon

性別: 男性

所属: Kasetsart University

氏名: Napatsorn Kaytakhob

性別: 女性

所属: Kasetsart University

氏名: Krittiyapron Phanuthat

性別: 女性

所属: Srinakharinwirot University

氏名: Woraman Jangsawang

性別: 男性

所属: Thammasat University

#### ・フィリピン共和国

氏名: Chris Jhunwyn Taghap

性別: 男性

所属: Visayas State University

#### ・ベトナム社会主義共和国

氏名: Tran Gia Hong

性別: 女性

所属: Can Tho University

#### ・ミャンマー連邦共和国

氏名: Kyaw Maung Maung Thwin

性別: 男性

所属: Sirindhorn International Institute of Technology, Thammasat University

#### ・ネパール連邦民主共和国

氏名: Pruna Bahadur Saud

性別: 男性

所属: Kathmandu University

## 4. 学習について

### 【講義】

アジア工科大学院（AIT）で受けた講義は大学院大学の講義ということや、GISに特化した講義が多かったため、専門性や難易度が高かった。また、普段聞きなれていないアジアの訛りのある英語で講義を受けるため、理解をするのが難しい場面や、困惑してしまうこともあった。しかし、内容については大学院大学ということもあり、ユニークで、最先端の研究を学ぶことができた。扱われた題材は、「健康のための地理空間技術、サトウキビ収量推定のためのUAVの応用、環境の健全性を理解するための衛星利用、アブラヤシ管理のためのドローン技術の革新、都市の持続可能性のための地理情報技術、地球規模の気候変動の影響と水資源、グレース衛星による地下水の観測、研究開発の実際、農作物保険のためのAI、ビッグデータとIoT、SDGsとグリーントランスフォーメーションのためのプラットフォーム、考古学・文化遺産分野におけるデジタル・ドキュメンテーションとGISの活用、再生可能エネルギー資源と技術、海洋プラスチック、大気質管理におけるイノベーション」など、GISと環境問題について学ぶ講義が行われた。難易度が高い講義が多かったが、他国の学生とともに、協力し合い、質問などをしながらGISと環境問題について理解を深めることができた。



(授業風景)

### 【学ぶにあたって】

日本から参加した学生の中には、今回主に学んだGISを専攻している者はほとんどおらず、専門外の分野を英語で学ぶことに苦戦した。そんな中、他国の学生に質問したり、みんなで分からないところを共有したりして、疑問を残さないよう積極的に行動した。初めは英語を聞き取ることが難しく、理解できないことが沢山あり戸惑った。日本では、単語を覚えること、長文を読むこと、たくさんテストを行うことで英語力を身につけてきた。しかし、実際に会話をする機会が少なく、話す力、聞く力があまり身につけていなかったことに気がついた。今回のプログラムでは、

他国の学生と同じ寮で生活していたため、自然と会話が増え、話す力、聞く力が身についた。初日は授業の内容の3割ほどしか理解出来ていなかったが、最終日には、授業の内容の7割ほど理解できるようになった。

また、他国の学生の学習意欲に刺激を受けた。他国の参加者の中には、ほぼ毎回授業で質問をする学生、寮に帰ってからも熱心に勉強を続ける学生が多くいた。なぜそんなに熱心なのか、彼らに質問をしてみると、「大学教授になりたい」、「ドローンの操縦士になりたい」、「研究者になりたい」といったような夢を語ってくれた。私は、自分の芯を持って学習する彼らの姿にとっても刺激を受けた。ミャンマー出身のタイの大学に通う学生は、ミャンマーでは、軍事クーデターが発生し母国の大学に行くことができないことを教えてくれた。思うように学習ができない中でも、自分から学習できる環境を作る姿に感銘を受けた。

日本では、不自由なく教育を受けられる事がとても幸せで、今まで「単位を取らないといけない」というような考えで大学の授業を受けていたことを深く反省した。今回のプログラムにおいても、「なるべく多くの知識や経験を吸収しよう」という学習意欲がしだいに強くなっていった。全員の学習意欲が高い中で講義を受けることで、学ぶことの楽しさ、知識を得ることの大切さに改めて気づかされた。

(尾曾 さくら、丹羽 愛優美)



(疑問点を話し合いながら解消する姿)

## 5. フィールドワーク

### • Geo-Informatics and Space Technology Development Agency (GISTDA)

GISTDAはGISやリモートセンシングの研究及び技術を応用し、宇宙と地球の研究に寄与する開発機関である。GISTDAは観測衛星の開発において好成績を有し、2023年の四半期目に新たな観測衛星を打ち上げる予定である。私たちは衛星開発技術の仕組みなどを学び、観測衛星から見た地球の実態について関心を深めた。併設の資料館では宇宙学の歴史や発展、最新の衛星技術について一般の来場者に分かりやすく紹介されている。その資料館には体験コーナーがあり、宇宙について楽しみながら学ぶことも魅力である。



### • Kubota smart farm

国内1位の農機具メーカー株式会社クボタが、センシング技術や自動化技術を活用し、スマート農業の実現に向けた取り組みを行っている場所。自動運転で動く農機やドローンを活用した肥料や農薬、水の噴霧などがある。実際に見て感じたことは、自動化による単純作業の長効率化を図っていると同時に、従来の農業のやり方よりもシンプルで、新たに農家を始めようとする人や近代農業を取り入れようとする人への機械操作のハードルが低く作られていると感じた。



さらに農場の各地にソーラーパネル等発電設備が設けられており、社会問題のみではなく、エネルギー問題等あらゆる面での持続性の高さに驚かされた。

### ・Hydro-Informatics Institute (HII)

タイは1995年の7月と8月に雨量が平均値を超え、大規模な洪水に遭った。当時のタイ国王のラーマ9世は洪水によるタイの経済的・資源的被害の状況を受け、タイの水資源の保持を高めるべく環境情報システム(TIWRM)の開発研究を進めた。その当時のHIIはタイ国立科学技術開発庁の基でそのプロジェクトを請け負う調査団体であった。そして、情報科学による効率的・持続的な水源管理を事業とする主要機関として、2019年に現在の機関名で設立された。HIIは観測衛星や無人航空機、様々な遠隔のネットワークから観測した天候や水量をデータ化し、分析を行い、可視化することを経て質的管理を行っている。その機関の見学を通して、GISの技術が水資源管理に活用されていることを知り、私たちにとってその重要性や日本の水資源の課題を考えるきっかけとなった。

### ・UAV Experience

講義内で学んだUAVの座学をもとに、実際に学内でマルチローター型のドローンを飛ばす演習を行った。現在幅広い分野で使用されているドローンであるが、実際に操縦や調査を体験することはめったにないため、印象深い体験であった。実際に感じたのは、操作はとてもシンプルで、事前説明を受ければ、直感的にすぐに操縦できる程であった。また、ドローンが肉眼ではどこにいるか分からないような高度や範囲を行き来できるため、非常に様々な用途があることを痛感させられる経験であった。 (佐藤 永汰、伊藤 勇人)





## 6. タイ王国の歴史文化体験

週末には、現地AITの学生とアシスタントの引率により、歴史や文化を体験できる各地を巡ることができた。本項目では、タイ王国の歴史と文化に注目して記述する。

8月26日（土）

### ・チャオサームプラヤー国立博物館

アユタヤ王朝の宮殿遺跡で発見された遺物や宝物を展示している博物館である。アユタヤ王朝の歴史が語られていた。剣などの武具に加え、当時の王室が使用していた装飾品などが飾られていた。どの装飾品も金で覆われており非常に煌びやかであった。アユタヤ王朝の権力をよく現していた。



### ・アユタヤ歴史公園

アユタヤ歴史公園を象に乗り散策した。象はタイの人々にとって特別な存在であり、象乗り場には以下のような小さな神社のようなものがあつた。10分間という短い時間ではあつたが、象の上から見るアユタヤ遺跡は普段では見ることのできない特別な景色に思えた。



(小さな神社のような建物)



(象に乗る様子)

### ・ウィハーン プラモンコンボピット

巨大な座像の大仏がある寺院である。観光客のみならず、タイ人も多く参拝している印象だった。現地AITの学生アシスタントから礼拝の仕方を学び、実際に行った。17メートルに及ぶ大仏は圧巻であり、私達に厳かな雰囲気をもたらした。

### ・ワット・チャイワッタナーラーム (独特の様式で建てられた仏教寺院)

17世紀に当時の王によって建てられた荘厳な仏教寺院である。寺院の向かい側にある「อ้อเจ้า ไร่ไชยวัฒนาราม」という店から民族衣装を借り、入場した。300年以上前に建てられた史跡からは神秘的な趣、そして歴史の重みを感じた。

8月27日 (日)

### ・ワット・アルン (暁の寺)

タイの象徴的な仏教寺院の1つである。ヒンドゥー教の影響を受けたクメールの建築様式を採用しており、タイの他の寺院とは一風変わったデザインであった。また、大仏塔には階段があり、急な階段を協力しながら中腹あたりまで上った。建物の表面には丁寧な彫刻が掘られており当時の職人の技を感じさせた。 (伴 紗也子)



## 7. タイ王国での衣食住

### ・タイ王国の衣服について

タイに到着して感じたことは日本と同じように蒸し暑いということだった。その気候に合わせて、どこに行っても多くの人が半袖短パンの夏らしい格好をしており、その格好が気温と湿度の厳しさを物語っていた。同時に、ファッションに関しては日本ほどこだわりを持っている人が少なくないと感じた。それには、日本人ほど周りの目を気にしないことや物価の違い、物の価値観の違いなど多くの文化的違いがあるのだと感じた。衣服について特徴的だと感じたものは、タイ王国の伝統衣装になる。部類としては、日本の着物のような物で、世界遺産の周辺には衣装の着付け屋が多く並んでいた。実際に、その衣装を見てみるとどれも金色をはじめ派手な色が多くあり、同時につけるアクセサリも金を基調としたものがほとんどだったことから豪華さ、煌びやかさが当時の権力を表しているのだと感じた。



(伝統衣装を着ている様子)

### ・タイ王国の食事について

日本の食とタイの食では、大きな違いがあったので紹介したいと思う。タイ入国から数日して気がついたことがある。それは、タイ人のほとんどが普通体型か痩せ型であることだ。大学内やデパートで周りを見渡しても、9割くらいの方が先に述べた体型の人だった。その訳を知ったのは、タイの食事を数日とってからだった。大学内のカフェテリア、飲食店やレストランなどさまざまな場所で食事を取ることによって気がついた。その訳は、どこも共通して日本と比べると量が少ないということだ。食事のスタイルが一人一品ではなく、大皿から自分の食べたい量を好きなだけよそうスタイルであった。そのため、自分好みの料理が出てきた際にも、自分だけのものではないのでたくさん食べることができなかった。私や友人含め、満足いくまで食べることはなく、食事を終えていたので、少し物足りなさを感じていた。その食

事を普段とっているタイの人々が肥満で無い理由がよくわかった。次に、タイの料理の味付けを紹介したい。多くの人がタイ料理といえば、辛いものを想像するだろう。実際に、どれも日本で売られているタイ料理よりも辛く、パクチーが効いていた。よって、辛いものやパクチーが好きな人と嫌いな人で好みが別れる料理が多いように感じた。どちらも苦手な人でも、美味しく食べられる料理も色々あったのでなにも食べられないということはない。また、どの料理も日本食のような味わい深さより、食材そのものの味を楽しむものだった。



(タイでの食事の様子)

#### ・タイ王国の住居について

私たちは民家を見たわけではないので、民家の違いは言えないが、建物について気づいたことがある。飛行機でバンコクの上を通った時に気づいたことは、想像していたよりも畑が多くバンコク全体が都会化し、ビルが立ち並んでいるわけではなかったことだ。一步都心から離れると、田舎の風景が広がっていた。反対に一步デパートに入れば、日本と同等かそれ以上に賑やかな明るい豪華な景色が広がっており、発展し始めていると感じた。

(野田 泰誠)

## 8. 異文化交流

私達は留学先であるタイの学生だけでなく、ミャンマー、ベトナム、フィリピン、ネパールの学生とも交流することが出来た。2週間という短い間だったが、お互いに協力し、かけがえのない時間を過ごすことが出来た。留学が終わってからも、近況を送りあい、交流を続けている。この章では、海外の学生と過ごした中で、日本の学生とは違った点や似ていた点について紹介する。

### ・挨拶

始めに、挨拶について紹介する。私達は、普段英語で意思疎通を行っていた。しかし、学生同士で仲良くなるためには互いの言葉や文化を知る必要があると考え、休憩中や休みの日には互いの言語や生まれ育った場所やその国独自の事情について教え合いをしていた。しかし、中には、日本には存在している単語や表現が、他の国の言葉で言い表すことの出来ない場合があった。例えば、日本で食事をする際には、「いただきます。」、「ごちそうさまでした。」のように食事を用意してくれた人への感謝や食材への感謝を表す。しかし、タイ、ベトナム、ネパールでは、「いただきます。」、「ごちそうさまでした。」に直接該当する言葉がない。そのため、留学中の食事の際には、それぞれの言語の似たような表現を教えてもらったり、日本語の「いただきます。」、「ごちそうさまでした。」を使用する学生がいたりすることで、異文化交流を行うことが出来た。

### ・食事

次に、食事について紹介する。タイと日本の食事は、とても似ている。例えば、箸を使ったり、主食がお米であったりすることだ。しかし、違う点もある。それは、料理の味付けだ。タイ料理の味付けは3種類に分けることができると、私は考えた。1つ目は、酸っぱい料理だ。トムヤムクンスープやパッタイなどが有名だ。しかし、私にとっては、どの料理もとても酸っぱく感じた。留学前までは、酸味の強い料理を食べてこなかったもので、初めての味を堪能することが出来た。また、タイの学生は、酸味を足すために料理にお酢をかける人もいた。2つ目は、辛い料理だ。タイでは、カレーをよく食べた。私は、カレーも辛い料理も大好きだったので、あまり苦労することはなかった。しかし、学生の中には辛い物が苦手だったり、お腹を壊してしまったりする人もいた。3つ目は、甘い料理だ。マンゴーライスやココナッツジュースが有名だ。私は、この留学で初めてマンゴーライスを食べた。食べる前は、どんな味なのか全く想像できなかったため抵抗感があったが、一度口にするとスプーンが止まらないほど美味しかった。また、タイでは新鮮な果物がたくさん採れるため、日本では高価な西瓜やメロンを味わうことができた。

## ・英語の発音

最後に、英語の発音の違いについて紹介する。留学では、講義も英語で行われた。講義を受けたり、他の国の学生と関わったりする中で、英語の発音に違いがあることに気付いた。例えば、日本では、” data” を「データ」と表記し、聞き取るときや発音する時も「データ」を使用する。しかし、タイで耳にした” data” は、全て「ダータ」と聞こえるのである。私だけではなく、他の日本人学生も同じように「ダータ」と聞こえたそうだ。発音が違う原因は不明であるが、私は方言が発生しているのだと考えた。なぜなら、私は、ミャンマーの学生に、英語の発音について指導を受けたからだ。彼によると、” L” と” R” の発音が同じに聞こえるため、コミュニケーションを取ることが難しい時があったそうだ。” L” と” R” の発音が一緒になってしまうことは、日本人英語学習者によく発生するエラーの1つである。そのため、私の発音が治るまで、根気強く正しい発音を教えてくれた。この経験があったことから、方言はどこにでも発生しうるものだと考えるようになった。自分が正しいと信じ続けるのではなく、変化や違いを受け入れることが異文化交流においてとても大切なことであると学ぶことが出来た。

(森岡 李胡)



(文化の交流を通して仲良くなった姿)

## 9. おわりに

今回のプログラムは、アジア工科大学と中部大学、研究機関等の協力と支援のもと、無事終わることが出来た。本プログラムに関わる全ての人々に、深く感謝の意を伝える。

初めて海外に行く参加者も多く、初めは不安だったが、参加者同士の支え合い、教員の協力のおかげで、かけがえのない有意義な2週間を過ごすことが出来た。この経験をそれぞれの今後に活かしていきたい。また、今後の本プログラムの更なる発展と継続を願い、広く共有することで、共通の知識として広めていきたい。

(丹羽 愛優美)